
生物災害 警察署からの大脱走劇

霞乃 疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生物災害 警察署からの大脱走劇

【NZコード】

N1711Z

【作者名】

霞乃 疾風

【あらすじ】

警察署が避難所で安全だと思っていた少年が
警察署が安全ではなくなつた時、
その危険な警察署から仲間と共に脱出するまでの
道のりを描いたもの

プロローグ？（前書き）

これは私
作者の処女作です
まだまだ未熟者ですが、宜しくお願いします

プロローグ？

その日……

俺の街からは“人間”と呼べるような
生存していると呼べるような人間は見なくなつた。

俺の名は永井零士一（ナガイ・レイジ）
この世界なら何処にでも居る……

訂正、何処にでも居ないけど居る
割とまあまあ普通の学生だ。

今日も日常通り

学校へ行き、勉強をして、家に帰り、寝る
そのパターンで一日が終わり
明日、またそのパターンが来るはずだったが……
その明日という日常パターンは来ず、非日常と言ふパターンが来た
のであつた

プロローグ？（後書き）

こんな感じで良いのかな?
凄く不安が残っています..

うん、一番安全そうな 警察署に突撃だーー！（前書き）

取りあえず、本編投下…

誤字がないか不安…

うん、一番安全そうな 警察署に突撃だーー！

その日、俺の街には普通の生存と呼べるような人間は居なくなつた。

零士「くそったれ！ どうなつているんだよ ここの街は……」

俺の名は零士

何処にでも居たはずの普通の学生や

俺は今、鉈とネイルハンマー×6本と日本刀を装備してある建物へ全力逃亡をしている

その場所とは、警察署！

避難所といったら此処！！ よくゲームなどで

ショットガンやら弾薬が沢山ある場所！

ちなみに…家の近くの銃砲店の中に入つてみたがガラスケースは破壊されて武器弾薬は全て持ち出された後だった。

え？何処で、鉈とネイルハンマーを手に入れたかって？

そりや…………勿論…………俺の武器は…ホームセンターですよ。

日本刀の方は 家の床板を外したら出てきました。

これが、なんと切れ味抜群！

「これでもか！？」と言つぐらいに

家の中に不法侵入したゾンビ共を切り捨てて殺りましたよ。ええ…

そのことは、置いていておいて

何とか無事に 警察署に到着！！

うはっ！ 警察署の入口門付近にゾンビの群れを発見した。どうやら入口門から、

警察署内に入ることは無理そのので（チョーンなどが巻き付いているし）

助走を付けて警察署の柵を飛び越える事にした

柵の高さは2m70cmだろうか？

だが、テンションがいつも以上にハイな俺には関係なかった。他のゾンビに気づかれないように

慎重に下がり、呼吸を整えて

柵に向かつて勢い良く走り出した。

「う、あー……」

「ちっ……！ 邪魔だ退け！！」

俺の行動に気づいたのかゾンビの一人が

入口門の破壊を放棄して

進行の邪魔をしてきたが、関係ない

俺は そのゾンビを踏み台にして柵に向かつて
大きく飛んだ。

踏んだ瞬間 グシャ！！ と言つネギを折る嫌な音が聞こえたが
無視をして何とか柵を乗り越えた。

「うわっ……最悪…腐敗した頭皮が靴の裏に着いた…」

ふと、嫌な音を出したゾンビの方を見ると

あらり……首が90度ボツキリ折れて倒れてい
ビクビクと無駄に痙攣していく

“無駄に” 気味が悪かった。

正直、これは生きた人間の頭を力ち割った直後の痙攣並みに
気味が悪い。

俺はそんな死体を見ながら

一、三回 ブルブルッ…と肩を震わせた。

「おお、怖い 怖い……さて、中に入らつかのう…」

必死に入口門の施錠を破壊しようとする
ゾンビ共を尻目に ボソリと眩き警察署内に俺は入つていった。

善良な逃げてきた一般市民なの……ヤメテ！ そんな疑いの田で俺を見ないだ

2話田投下

善良な逃げてきた一般市民なのに……ヤメテ！ そんな疑いの目で俺を見ないで

新人A 「動くな。」

新人B 「…………言葉が分かるなら、武器を全て捨て 手を上げろ。」

エントランスに入ると いきなり俺に向かって
二つの拳銃が突きつけられた。

二人とも 特有の青い服を着ていることから

警察官と言つことが分かった。

発砲など生身の人間からしてみては、たまたまものではないので
ゆっくりと 腰に差してあつた日本刀、ネイルハンマー、鉈を

地面に置き 手を上に上げた

だが、二人の警察官は俺から銃口を外すことはなかつた

「おい、只の俺は一般市民だぜ？外の怪物共とは違つ

ぶつちやけ……日本刀を装備している時点で
只の一般市民では、無いのだが……

「……外の全ての入口は頑丈に施錠したはずだ！」

「何処から お前は入ってきた？」

何か回答として歯車が噛み合つていらない様な
気がするが…此處でツッコミを入れてしまうと話が
前に進まなくなってしまうので、左側の警察の質問に答えることとした。

「えっと……入口門近くの柵を飛び越えてきました。」

『飛び越えてきた！？』

二人の警察官が同時に同じことを馬鹿みたいな大きな声で聞き返してきた。

御陰で、奥の方に居る

避難してきた一般市民全員も

俺の存在に気がついたようであった

「え、ええ……助走を付けて、

外の怪物の頭を踏み台にして飛び越えました……」

「2m70cmの柵を？…………信じがたいな。」

「残念だが、私達は君の言つている事に関して信用できない。

市民の安全を第一に君を此処で拘束する。」

「ちよ……」

俺は呆気なく一人の警察官に拘束された。

まあ拳銃を突きつけられて居るままなのだから

仕方がない。まだ死にたくない者ですし……

俺は警察に引っ張れながら、警察職員オフィスに着いた
その時だった

「お前等、なあ～に やつているんだ？」

ふと、背後の通路から何処か聞きなれた

別に懐かしくはないけど、懐かしいような声が聞こえた。

「……！」

「俺の弟に何か様か？コノ野郎。」

「虎影……。」

「……！」

「虎影…“さん”を付けろと言つているだろつ…！新人A、B！」

バシッ！ バシッ！！

と、一発ずつ 僕の姉貴“虎影（トラカゲ）”はA、Bの頭をひつぱたいた

いつ見ても、姉貴の人を殴る音は痛そうだ。

「す、すみません…虎影さん」

「虎影さんの弟さんでしたか…すみません。」

「それで良い。で、早速だが零士の拘束を解け。」

「それは…流石に…」

「ああん？ もう一発、喰らいたいか？」

「滅相も御座いません…！ どうぞご自由に…！」

流石は泣く子も黙る姉貴…言葉に容赦がねえ…
と言つよりも、何かもう一人を殴る準備に入つてゐるし。
さらには、その一人は全力で姉貴から離れてゐるし…

「よくここまで無事に来れたな、取りあえず「コーヒーでも飲むか？」

そう言つと姉貴は、自分が飲みかけたのであるつ
「コーヒーを自分の前に置いてきた。

「あ、喉が乾いていないので結構です。」

「そうか？コレ意外と美味しいのだが…」

そう言つと姉貴はズズツと音を立てながら
残つてゐる「コーヒーを飲み干した。

善良な逃げてきた一般市民なの元のヤメテ！ そんな疑いで田中で俺を見ないだ

短い文章の癖に
書くの遅くてすみません…

次回分も時間が無いので
遅い投稿となります…

パシリられる俺って……一体……

「で、コレ お前の装備な 返すから。」

「ありがと……姉貴、この街で何が起つててるか分かる?」

装備を返してもらひた俺は
警察官である姉貴に

今、街の中で起つててる事について聞いてみることとした。

「さあな。知らん……俺が気づいた頃には、この有様よ。
「因みに気づいた時つて、何時?」「
「えつ?いや……その……」

目が泳いでいる

「…………どつせ、ろくでもない時に やつと気づいたのだろう
例えば、勤務中に“彼女”とデートしていたか……
勤務中に友達のライブに参加していた時とか……

「…………普通に、外のパトロールをしていたぞ。…………本当だぞー?」
「……嘘だろ。本当は?」

姉貴が『…………本当だぞー?』と最後に付けたときは
ほぼ嘘である。やはり、口クでもないことをしていたようだ。

「……むう……。……このトスクで毎晩をしていました。」

俺は思つた……この日まで よくクビにならなかつたなど……

「はあああ……。」

「そ、そんなに深い溜め息をつかなくても、いいじゃないか……！」

俺は姉貴の行動に対し

こんなに深い溜息をしたのではない。

こんな部下を持つてしまった姉貴の上司に向かつて哀れみを込めて溜息をしたのであった。

「あ、そ、そうだ！！ホールに俺の仲間が居るんだ。これを渡してやつてくれ。」

そう言つと、姉貴は「コードの内ポケットからビンに入った液体3本を取り出すと俺に渡した。

「何コレ。」

「ホットドリンクだ。」

「…どうせ、また口クでもない薬品でしょ？」

「良いから、行つてこい。」

俺は追い出されるように警察職員オフィスを出ると巨大なホールの中から姉貴の友達を探しに出た。

案外、早く見つけることが出来た。

まあ見つけるというより、見つけられたのだが。

……毎回見るたびに思うのだが、

姉貴の友達会うたびに体の傷が多くなつて行くように見えた

「おひ、零士 久しぶりだな。童貞は卒業できたか？」

彼女は確かに笑うと歯が綺麗な猛虎さん… 実名は知らない。

姉貴が、『猛虎、猛虎』としか呼んだことがないので皆、猛虎と

呼んでいる。

「いえ、まだです。」

「で？　お前がアタイ等を探してこると書いつ」とは、虎影から渡すように言われたんだるひつへ。」

「その通りです。どうぞ。」

で、アタイ口調の人気が白狼さん
姉貴と昔からの悪友らしい……

本人　曰く白っぽい髪の色がチャームポイントらしい

「…………どうも。」

そして、このフードを被つていて必要なこと以外
全くしゃべらない人、琥珀さんだ。

「なんだ…ホットドリンクかよ。」

「まあ、無いよりはマシだ。」

一人が姉貴の差し入れに対してコメントを

している時だった。琥珀さんが何かボソッと呟いた

「……………痒い。」

「へ？…今、何か言いました？」

「……………何も。」

確かに今、

何かを呟いた気がしたんだけど…
気のせいいか？

「ふう……美味かつたぜと伝えてくれ。」

「同じく、温まつたと言つておいてくれ。」

どうやら一人はホットドリンクを飲み終わつたようだ
中身はアルコールの様だ

二人の口からは、アルコールの香りが漂つてきた上に
ほんのり顔が赤く染まっていた。

「分かりました。」

俺が軽く3人に礼をして
立ち去る所としたときだった。

「……………。」バリバリバリバリ

全身を一心不乱に搔き鳴つている琥珀さんがそこに居た

パシリられる俺って……一体……（後書き）

魔鬼 改 は、半分 式式に任せて
私は「コチラを少し書いひとつと思ひます

魔鬼で見たことのある名が あります
平行世界として見てください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1711z/>

生物災害 警察署からの大脱走劇

2011年12月30日22時45分発行